



P2~P5

# 「いいね！」な人や活動から NPO ができるおはなし。

愛情たっぷりの味噌汁で 強い体と心を育む

「太田一杯の味噌汁プロジェクト」

P6

市民活動お役立ち情報

活動するための“お金”②「委託費」

P6

編集スタッフのつづやき

今月の表紙「ぼく、ひとりできるよ！」

緑の野山いっぱい、蝉の鳴き声が響きわたる8月。大仙市太田にある敬愛館で、お母さんたちに交じて小さな手を一生懸命動かしている男の子がいました。大きな鍋にたっぷりのお水、おたまには味噌。一体何が出来るのでしょうか。

この日、みんなで作っていたのは「冷や汁」と呼ばれる冷たい味噌汁。具材は地元で採れたミニトマト、枝豆、とうもろこしのカラフルな3種。いつもより少し濃めに味噌を溶き、具材は食べやすいように下ごしらえして凍らせておくのがコツだとか。「冷たい味噌汁なんて…」と思ったみなさん。それは飲まず嫌いかもしれません。この後、参加した親子から「おかわりちょうだい！」の嵐が巻き起こったのですからー。今月は、味噌汁を通して、人と人、地域をつなぐ心温まる活動をご紹介します。さっそく次のページへ！(「いいね！」な人や活動からNPOができるおはなし「太田一杯の味噌汁プロジェクト」)

あんべ  
いいな  
秋田県





特別企画 ↓ ↓ ↓

# 「いいね！」な人・活動から NPOがわかるおはなし。

愛情たっぷりの味噌汁で、  
強い体と優しい心を育む  
「一杯の味噌汁プロジェクト」

食卓に並んだほかほかのご飯とみそ汁、  
焼き魚に旬の野菜で作った煮物、和え物。  
この日本食をシンプルでおいしいと感じる  
か、質素で物足りないと感じるか、食に対  
する価値観は人それぞれです。

「太田一杯の味噌汁プロジェクト」では、  
心身の成長に必要な栄養素が豊富に含まれ  
ている味噌汁の良さを見直し、地元で採れた  
食べ物を通して、子どもたちに自分の体や命  
を守ることの大切さを伝えていきます。

代表の田口名緒さんは、7歳、4歳、2  
歳のやんちゃ盛りの子を育てているお  
母さんです。お子さんに食物アレルギーがあ  
ることが分かってから、医師の指導のもと除  
去食療法を行ったり、加工品や市販のお菓子  
を使わずにすべて手作りするなど、人一倍食

事や家族の健康に気を配ってきました。そんな田口さんが、地域の子どもの食や健康にも目を向けるようになったきっかけは、秋田市でご飯と味噌汁に着目した食育活動を行っている「一杯の味噌汁プロジェクト」代表の小山明子さんとの出会いでした。子どもたちの将来が豊かな社会であるためには、自分子どもだけではなく、子どもたちみんなが健康でなければならぬという小山さんの考え方に感銘を受け、田口さんは同団体が主催する勉強会や調理実習などに参加するようになったといいます。「ここで学んだことを地元の人たちも伝えたい。」田口さんは、心の中に芽生えたそんな想いを小山さんに伝えると、小山さんの後押しを受けて平成26年4月、地元である大仙市太田町で、「太田一杯の味噌汁プロジェクト」を立ち上げました。

現在、メンバーは8人。主な活動は、大豆の栽培から味噌作りまでの一連の過程を親子が体験する場を作ることです。全行程を





## 子どもたちと大豆づくりに挑戦



太田一杯の味噌汁プロジェクトでは、大曲農業高校太田分校や認定こども園太田わんぱくらんどのびのび園などと一緒に大豆栽培を行っている。

編集部がお邪魔した9月上旬には、高校生と一緒に大豆畑の雑草取りに汗を流していた。途中、大豆として完熟する前の枝豆をちょこっと拝借している場面も。「知っている？枝豆は、秋になると大豆になるんだよ」。この日は、作業後にバーベキューを行い、取り立ての枝豆の味を楽しんでいた。

経て味噌ができるまでは1年以上の時間が必要だといいます。心をこめてその時期に合った作業を行うことで、自然の恵みや食べ物への感謝の気持ちをゆっくり紡いでいきたいと考えています。その合間には、地元の親子や園児・小学生を対象に、味噌を持つ栄養価や昔ながらの味噌の作り方などを伝える勉強会や地元産の野菜を使った

味噌汁を味わうイベントなどを行っています。「太田は昔から農業が盛んで、食に恵まれた地域。地元で作られた味噌や野菜を使った味噌汁を食べて、みんなに健康で豊かな生活を送ってほしい。また味噌汁の具材を通して地産地消を促し、地域の元気も生み出していきたい」と田口さんは語ります。

### 太田一杯の味噌汁プロジェクトのおもい

#### 一、自然(食べ物)とのつながり

まちゃんと食べれば、心も体もまちゃんとする  
私たちは食べ物を通じて自然とつながっている

#### 二、人とのつながり

作物を作る人、食事を作る人、一緒に食べる人、  
みんなつながっている

#### 三、太田町とのつながり

太田で作られたものを太田の人が食べる↓町が元気になる

#### 四、食べ物を自分で作る強さ

自分の命を自分の手で紡いでいこう

#### 五、丁寧な人生は楽しい

だしを取って味噌汁を作って家族で飲む…人生の宝物



味噌汁を味わって  
子どもたちに  
こんな風に色々な事  
感じてもらいたいねあ  
もちろん大人にも!





密着



# 味み噌そパーティー!

7月、太田一杯の味噌汁プロジェクトは、認定こども園「太田わんぱくくらんど」のび園で味噌パーティーを行いました。この冬、園と合同で味噌作りを行うこととなり、その事前学習として園児に味噌の味や香りに親しみをもってもらおうと企画したものです。

七夕飾りが涼しげに揺れる園内には、子どもたちの声がにぎやかに響き渡ります。パーティーを楽しく盛り上げるのは、浴衣姿の味噌汁母ちゃんたち。味噌汁の魅力をユニークな手遊びやお話で伝えていきます。その後、いよいよ今日の“主役”が登場。ずっしりと重い味噌樽と、園児が自分で育てて収穫したというザルいっぱいのおユウリが運ばれてきました。子どもたちは目を輝かせて待ちきれないと言わんばかりの表情です。長年、地元で親しまれてきた麴入りの味噌との贅沢なコラボレーションに「おいしいね」「おかわりちょうだい」と評判も上々でした。みんなのお腹が膨れたところで、味噌汁母ちゃんから園児に素敵なプレゼントが贈られました。それは、カ



ラフルなハート型の画用紙が貼り付けられた大きな味噌汁椀の置き飾り。画用紙には、園児一人一人が大事にしているものや大好きな人のことなどが書かれています。「この味噌汁椀にはみんなの心がいっぱい入っています。明日から、朝にいただきますと言ってこのお味噌汁を心で飲んでね。するとみんなの心が元氣いっぱいになるんだよ」と優しく語りかける田口さん。味噌汁の中には、味噌を作る人、野菜を作る農家、料

## → → → 太田での活動を 応援しています

### 「一杯の味噌汁プロジェクト」 発起人 小山明子さん



「一杯の味噌汁プロジェクト」は、東日本大震災後、どんな状況下でも生きぬくことができる強い体と心を子どもたちの中に育みたいと考えたことがきっかけで、平成24年秋太田市で立ち上げました。健康面でも理にかなったご飯と味噌汁に着目し、子どもたちが食べることで自分の命や体を守ることができるよう、18歳までにご飯と味噌汁の煮炊きができる子どもを育てていくことを目指しています。

この春、田口さんが中心となって始めた「太田一杯の味噌汁プロジェクト」は、味噌汁を通して地域活性も目指すという独自の視点を取り入れています。また長野県の食育系NPOもこの活動を始めるなど、全国的にも広がりを見せ始めました。

発起人として、味噌汁プロジェクトの活動がその地域の独自性を組み入れながら、徐々に広がっていくことは何よりの喜びです。これからも太田での活動を見守り、互いに手を取り合って子どもたちの生きる力を育てていきたいと思っています。

理をする家族：たくさんの人たちの心が入っていることや、毎日、味噌汁を飲むことで強い体と優しい心が育まれることを園児たちに伝えました。

「子どもたちが今日、家に帰ったときに、味噌を食べたことやこの場で感じたことをお家の人たちと話すことで、家族の中でも味噌への認識が変わり、食生活を見直すきっかけになってくれたら嬉しい」と、味噌汁母ちゃんの話します。園児たちと一緒に大豆を収穫する秋、味噌を仕込む冬に向けての準備が整い、これからの活動の広がりに想いを膨らませていました。

## 味噌パーティーを 終えて ← ← ←



### 太田わんぱくランドのびのび園 園長 佐々木 千友子さん

子どもたちは、味噌汁母ちゃんから味噌の良いところを教えてもらったり、自分たちで育てたキュウリに味噌を付けて食べたりと、味噌や旬の野菜に親しみを感じていた様子でした。自分たちで収穫したことで、野菜嫌いの子もそれを食べようとしてくれるんですよ。今日の子もたちは、本当に嬉しそうでした。この地域は、野菜や味噌作りが昔から盛んな地域です。これからも味噌汁母ちゃんをはじめ、地域の人たちとの関わりを大事にしながら、子どもたちに昔ながらの味や文化を伝えていきたいと思っています。

\*1 味噌汁母ちゃん  
太田一杯の味噌汁プロジェクトで活動するお母さんメンバーの呼び称

### ●太田一杯の味噌汁プロジェクト

代表 田口 名緒さん

連絡先 TEL. 090-4319-5625

家族の健康に気を配ってきた田口さんが、ある出会いをきっかけに家族以外の健康と地域活性にも目を向けるようになった今回のおはなし。NPOの根底にあるのは、このように自分たちだけではなく、社会や地域全体の幸せを願い、行動する想いです。子どもたちの生きる力と地域の元気を育むため、今日もパワフルに動き回るお母さんたち。今、自然豊かな緑の里は、すべてを育む母の優しさに包まれ、未来に向かって輝く光を放っています。(高橋幸子)

太田一杯の味噌汁プロジェクトが目指しているのは、人間が生きていくために必要な力を子どもたちの中に育てること。そのために身近な食事である味噌汁を切り口に、食することで命をつないでいる自分たちの命を見つめ直そうと様々な方法で働きかけています。しかし、その先にある想いはもっと大きく深く、人々の暮らしに関わる生活全般の基本を見直し、誰もが人と人、自然とのつながりを大事にしながら生きていける地域を作ることだといえます。

身近な夢は、自分たちで色々な種類の豆を育てて味噌を仕込んだり、味噌を使った商品を開発したりして、味噌汁母ちゃんの味として販売すること。さらに将来的には、開発した商品や地元の野菜などを販売するアンテナショップなどを作り、地域住民が気軽に集える交流の場にしていきたいと夢を膨らませています。



## THEMA



# 活動するための“お金”④「委託費」

NPO活動を継続するための収入源には、何があるのでしょうか。これまで「助成金・補助金」「会費・寄付金」「事業収入」について紹介してきましたが、今回は「委託費」について紹介します。助成金や補助金、委託費は、NPOが法人化をめざす場合の動機のひとつにもなっているようです。（高橋茂）

### ■ 行政がNPOに対して行う「委託」とは？

本来、行政がなすべき業務をNPO等へ依頼することを「委託」と言います。たとえば、子育てママの悩み相談に対応する業務を、NPOが行政に代わって（委託を受けて）行うことがあります。行政が直接相談に乗るよりも、子育ての大変さがよく分かっているノウハウもあるNPOが対応した方が、ニーズに合ったきめ細かい対応ができるからです。一定のルールはありますが、民間の創意工夫を期待されているため比較的自由に運営することができ、効率的かつ効果的な活動が可能となります。委託業務の内容としては、講座の開催、公園の管理、交流スペースの運営など多様な事業が公募されているようです。

### ■ 委託と補助の違いは？

行政からの「補助」は、行政が直接行うことではないものの公益上必要と思われる事業において、NPO等が補助を受けることで社会的課題が解決される場合に行われます。補助金を受ける側（NPO等）が実施主体であり、事業の成果や最終的な責任も補助金を受けた側に帰属します。一方、「委託」は、委託する側（行政等）が実施主体（主催者）となり、受託者（NPO等）がその運営を行うものであり、事業の成果、最終的な責任は委託する行政側に帰属します。

### ■ 委託事業と指定管理者制度とは？

かつて「公共施設」の管理を行うのは公共団体か公共団体の出資法人に限られていましたが、多様化する地域課題に対応するため、こうした制限が無くなり、民間の団体でも管理運営ができるようになりました。「指定管理者制度」は、公共施設等の管理権限も含めて委任するもので、民間企業、団体、NPO等の中から最も適当であると認められる団体を指定し、管理業務を行ってもらうものです。

今後は、公民館や体育館等の指定管理者にNPOが指定される可能性も高まっていますので注目です。

### ■ 事業委託を受けることは難しいですか？

簡単ではありませんが、挑戦してみる意義は大きいと思います。自団体の活動分野と重なる事業を受託することにより、財源を得ると同時に団体のミッションを達成することができます。

発注する側の行政としては、大切な市民の税金を適切に執行する責任があり、委託を受けた側は、事業を確実に実行する能力と責任が求められます。会計処理等の管理能力に加え、「法人」であることが条件となるケースが多くなっています。

◆南部市民活動サポートセンター TEL.0182-33-7002

秋田県ボランティア・NPO 活動ニュース県南版

**ハンサン**

2014年9月10日発行  
9月号 VOL.95

発行：秋田県企画振興部地域活力創造課

〒010-8570 秋田市山王西四丁目1-1 TEL.018-860-1245

編集：特定非営利活動法人秋田県南 NPO センター（南部市民活動サポートセンター）

〒013-0046 横手市神明町1-9

TEL.0182-33-7002 FAX.0182-33-7038

南部市民活動サポートセンター

【相談受付】月・火・水・金 9:00~18:00  
土 9:00~17:00

【休館日】木曜日・年末年始（12/29~1/3）

〒013-0046 横手市神明町1-9

TEL.0182-33-7002 FAX.0182-33-7038

E-mail.ssc7002@luck.ocn.ne.jp

http://www.akita-kenmin.jp/hg030001



編集スタッフの VOL.05  
つばやき

NPO強化事業  
担当理事 高橋 茂

週3日午前だけのつもりで始めた私のセンター勤務。最近では業務が増えて週4日、朝から晩までセンターにいることも珍しくありません。ノマドライフよろしく、複数の場所を自由に移動しながら仕事をスタイルを、以前は面倒くさい!と思っていたのですが、最近はこの仕事スタイルこそ21世紀に通用する道ではないか。おそらく私がパイオニア(笑)ではないか、なんて考えるに至りました。移動用書類ボックスの中には、パソコンや当面必要書類がほぼ完ぺきに収納され、無駄なものなどない。以前のように、あの書類が無い!この書類が無い!と騒ぐことも無くなりました。いよいよ極めたぞ!(笑)誰も褒めてくれないので心の中でガッツポーズ!